

観察を軸とした人間教育について～Art/Arts提案書報告②～

Human Education Centered on Observation : Art/Arts Proposal Report 2

杉原 麻美*・後藤 学**・森 博樹***・竹之内 奏****

淑徳大学人文学部*・白鷗大学教育学部**・一般社団法人子供教育創造機構***・日本知育音楽芸術協会****

現代社会に対応した人材育成への期待から、Art/Artsを採り入れた学習機会は対象年齢や組織を問わず同時多発的に拡大している。STEAM教育研究会の第2分科会では、とくにSTEAM教育の「人間教育」の面に着目し、教育実践例と関連研究を踏まえ、Art/Artsからの洞察・観察によって学習者側にどのような理解促進、意識変容、動機形成がもたらされているかを整理する予定である。本発表では、その中間報告と今後の活動について述べる。

キーワード：STEAM教育，人間教育，創造性，表現力，メタ学習，社会的スキル

1. はじめに

STEAM教育研究会の第2分科会では、Art/Artsが学習に採り入れられることにより広がる「人間教育」の面に着目した研究を進める。本稿では、前提となる背景および論点整理と、今後の活動について述べる。

2. 「人間教育」が求められる背景

2.1. 社会的側面：論理的・合理的思考のみの限界
報告総論で触れた通り、不確実性と複雑性が高まる社会においては、変化する現実を認識する知覚的認識、とくに観察力を磨いて事象を捉え直すことが求められており、これがイノベーションにつながる。

一方、社会の変化に対応した教育カリキュラムの検討では、CCRが21世紀におけるK-12教育（幼稚園から高校までの教育）の指針づくりを試み、2015年に「21世紀の学習者と教育の4つの次元」を示した（図1）。教育を4つの次元（知識、スキル、人間性、メタ学習）に整理し、メタ学習は他の3つを包括するものと位置づけている。メタ学習とは、いわば「学び方の学び」であり、自分の認知・思考・行動を高いレベルで俯瞰して捉え、自身がどのように知識、スキル、人間性を学んでいるかを省察することである。自分の内側・外側のあらゆることを「観察」するとも言え、このような観察・洞察によるメタ学習を促すうえでArt/Artsを採り入れた学習は有効である。学校教育のみならず、現代社会に対応した人材育成への期待から、近年は社会人教育での実践例が急増している。

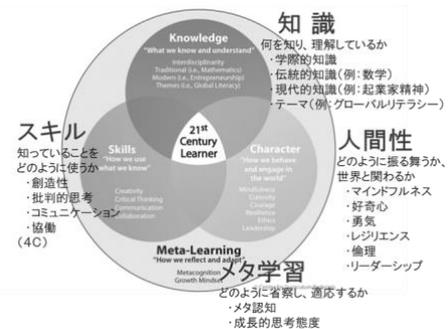


図1：21世紀の学習者と教育の4つの次元

2.2. 個人の側面：自己の感覚・内発的動機への気づきと他者受容

日本の若者の自尊感情の低さが問題視されるようになって久しい。内閣府は2018年度に5年ぶりの国際比較調査を行い「令和元年版 子供・若者白書」の特集にまとめている。考察では「日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自身を肯定的に捉えている者の割合が低い傾向にあるが、日本の若者の自己肯定感の低さには自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さが関わっている」と指摘している。「自分が役に立たない」と感じる背景のひとつに、教科学習が中心の学校教育による「勉強嫌い」が挙げられる（図2）。成績上位・中位・下位のいずれも小6生から中2生にかけての低下傾向は共通している。成績階層に寄らず子供が学びを肯定的にとらえられる教育を目指すうえでArt/Artsの可能性は大きい。Art/Artsを興味の入り口にすることや、多様な感じ方を受容し内発的動機を促す学習設計に採り入れることが可能である。

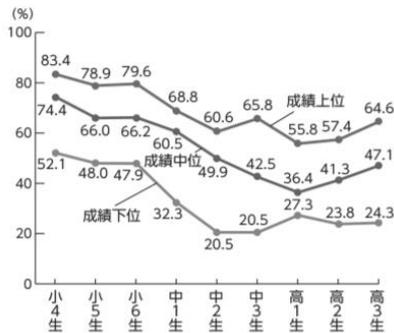


図 2 : 成績階層別 勉強が「好き」の比率[4,p.7]

2.3 コミュニティの側面：共同体認識の醸成

OECDが示したLearning Framework2030 (図 3 : Learning Compassの前身) では、2030年の地球規模でのWell-Beingを目指すうえでのコンピテンシーとして、①新しい価値を創造する力、②緊張とジレンマを克服する力、③責任ある行動を取る力の3つを挙げている。このモデルでは、学習者が仲間やコミュニティの中で育まれることと、共同体認識を醸成することの意義が示唆されている。Art/Artsは「問い」を投げかける機能を有し、世代・国籍を問わない共通語として人をつなぐ結節点になり得る。このようなArt/Arts が紡ぐコミュニケーションは、共同体やそこに参加する個人の共同体意識の醸成にもつながる。

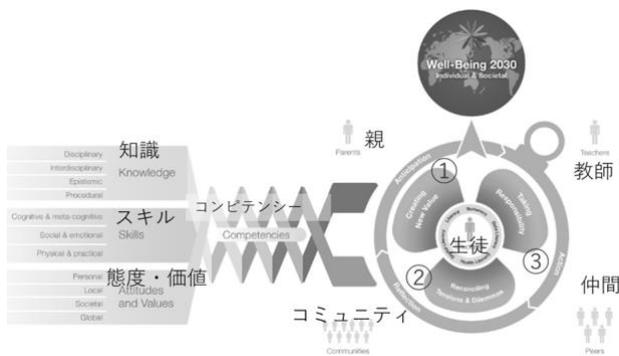


図 3 : OECD Learning Framework2030

表 1 : 幸福を感じている割合

人とのつながり 多	84.3%
人とのつながり 中	73.9%
人とのつながり 少	63.3%
人とのつながり なし	36.3%

引用：リクルートワークス研究所(2020)

とくに日本では、社会資産である人と人とのつながりが希薄化する傾向が危惧される。リクルートワークス研究所がまとめた提言 (2020) では、米国、フランス、デンマーク、中国、日本の5カ国の比較調査から、日本は人間関係が家族と職場に集中している傾向と、人とのつながりの多少が幸福感と連関している (表 1) ことが指摘されている。そして、人とのつながりを「ベース性」「クエスト性」の因子から分析している。

- ①ベース性：ありのままできていることができ、困ったときに頼れる安全基地としての性質
- ②クエスト性：ともに実現したい共通の目標がある、目的共有の仲間としての性質

Art/Artsには、ベース性やクエスト性に富む場を形成する力がある。少子高齢化が進む日本においてコミュニティ形成での役割も一層大きくなっている。

3. 第 2 分科会の今後の活動

これらの背景のもとでArt/Artsを採り入れた学習機会は対象年齢や組織を問わず同時多発的に拡大している。第2分科会では、これらの教育実践例を横断的に収集し、その中から代表的な取り組みについて聞き取り調査を行い、とくに人間教育の視点から分析を行う予定である。Art/Artsの教育効果について網羅的に調査したものでは、OECDの教育研究革新センター(CERI)の『Art for Art's Sake?: The Impact of Arts Education』(日本語訳書「アートの教育学：革新型社会を拓く学びの技」)がある。この中では、音楽、視覚芸術、演劇、ダンス、マルチ・アートなどの認知的成果や社会的スキルに対する効果について先行研究を整理し考察されている。要旨の最後には、「芸術は科学以上に、すべての子供が異なる方法で理解することを容認する。なぜならば、芸術には正しい答え、間違った答えというものがなく、探究したり試したりする自由を生徒に与えるからである。また、芸術は内省したり、独自の意義を発見したりするための機会となるからである」と結んでいる。このように、学習者の理解促進、動機形成、内省、意義の発見につながる実践例を通し、新たに広がる教育とWell-Beingの可能性について深めていきたい。

参考文献

CCR (Center for Curriculum Redesign)
<http://curriculumredesign.org/>

日本 STEM 教育学会 第 3 回年次大会 (2020 年)

C. ファデル, M. ビアリック, B. トリリング (2016)

『21世紀の学習者と教育の4つの次元：知識, スキル, 人間性, そしてメタ学習』(著、岸学 監訳、関口貴裕, 細川太輔 編訳、東京学芸大学次世代教育研究推進機構 訳) 北大路書房

令和元年版 子供・若者白書 (内閣府)

ベネッセ教育総合研究所, 東京大学社会科学研究所

「速報版 子どもの生活と学びに関する親子調査
2015-2016：親子パネル調査にみる意識と実態の
変化」(2016)

http://berd.benesse.jp/up_images/research/2016_oyako_web_all.pdf

OECD Learning Framework2030 (2017)

リクルートワークス研究所 (2020) 『提言ブック マルチリレーション社会：多様なつながりを尊重し、関係性の質を重視する社会』

https://www.works-i.com/research/works-report/2020/multi_03.html

OECD教育研究革新センター (2016)

『アートの教育学 革新型社会を拓く学びの技』
(篠原 康正 篠原真子 巖 晶 訳) 明石書店